

市街化に伴う自治会分割地域における居住者の祭りへの関わり方とコミュニティ意識

The Residents' Participation in a Festival and Community Consciousness in the Area where the Residents' Organization was Divided by the Urbanization

大平 和弘* 中堀 卓** 浦出 俊和*** 上甫木 昭春***

Kazuhiro OHIRA Suguru NAKAHORI Toshikazu URADE Akiharu KAMIHOGI

Abstract: In this study, we investigated the residents' participation in a festival and the community consciousness of residents in the area where the residents' organization was divided by the urbanization. The study area was the region of the old Tenma village in Otsu-ku, Himeji-shi, Hyogo-ken. And the festival which we investigated was an autumn festival of the Usukihachiman Shrine. We comprehended the changes in the residents' organization and the management of the festival by interview survey to the residents and follow-up survey of a festival float. As a result, the study area was divided into 5 districts based on each property. And according to the results of questionnaire survey to each district, the residents living at the old village were managing the festival according to the old custom. And they were building a close community compared with other residents. On the other hand, the households which only view the festival had a stronger attachment to the local area than the households without participation in the festival. In order to utilize the festival to reconstruct a local community, it is necessary to create opportunities and places for participation in the festival in districts other than the old village.

Keywords: festival, local community, residents' organization, old village

キーワード: 祭り, 地域コミュニティ, 自治会組織, 旧集落

1. はじめに

大都市近郊では、市街化の進行と人口流入による「混住化」が叫ばれて久しく、自治会の分割や再編などの組織的転換を図りながら、地縁的なコミュニティとそれに支えられた地域の伝統文化を今日まで維持してきた地域も少なくない^{1,2,3)}。しかし、これらの地域においても、今後の急激な人口減少・超高齢化社会の到来は避けられず、地縁的コミュニティ自体の存続が危ぶまれ、地域コミュニティの再構築を図る必要が生じるものと考えられる⁴⁾。

そのような中、地域で継承されてきた祭り⁵⁾が多様な主体を惹きつけ、地域コミュニティの再構築に寄与する可能性が注目されている。例えば、杉本ら⁶⁾は、祭りが新規居住者に地縁的つながりや意識を育み、地域コミュニティの形成に有効である事例を、根岸ら⁷⁾や木田ら⁸⁾は、祭りを契機に新たな地域運営が展開する事例を、塚ら⁹⁾は、祭りが地元産業の衰退や人口減少といったコミュニティの脆弱化を回避している可能性をそれぞれ報告している。また、特に神輿や山車や踊り手が街中を巡る「巡行型祝祭」¹⁰⁾では、祭りが空間的に広く居住者と地域をつないでいること¹¹⁾や、祭りが都市のアイデンティティを高める要素になり得ること¹²⁾が報告されるなど、巡行ルートや見せ場といった祭りの空間利用のあり方に関する研究が進められている^{13,14)}。

しかし、祭りは必ずしも開放的なケースばかりでなく、氏子組織が形骸化し、祭りの運営が自治会組織へ転換されたとしても、地縁者が中心を担う自治会の場合、公営住宅団地の居住者は祭りに参加できないなど、市街化過程に生じた地区区分が地域コミュニティ形成の障壁となっている実態が指摘されている¹⁵⁾。

これらの課題に対し、市街化過程において自治会を複数に分割させながら地縁的コミュニティを明瞭に存続し、祭りを継承してきた地域において、地区区分ごとの祭りとの関係に着目し、祭りが周辺自治会や新規居住者を含めた地域コミュニティの再構築に寄与する可能性について研究された事例はない。

そこで本研究では、市街化に伴って自治会組織の分割・再編を

図りながら、地縁的コミュニティを存続してきた地域である「兵庫県姫路市大津区天満周辺地域」¹⁶⁾を対象に、居住者の祭りへの関わり方の現状とコミュニティ意識について把握し、地域コミュニティ再構築に向けた祭りの可能性とあり方について考察することを目的とした。具体的には、自治会組織の変容を踏まえた上で、祭りの運営や空間利用の実態を把握し、地区区分ごとの居住者の祭りへの関わり方と祭りへの認識の現状を明らかにした。さらに、居住者の祭りへの関わり方とコミュニティ意識との関係を明らかにし、総合考察を行った。

2. 研究方法

(1) 研究対象地域

研究対象地域は「兵庫県姫路市大津区天満周辺地域」(旧天満村域、以下天満地域)とした(図-1 破線枠内)。天満地域は、高度成長期における臨海部の一大工業地帯出現に伴う社宅や団地の建設、および京阪神圏のベッドタウンとしての戸建住宅開発などの急速な人口流入が進む中、地縁的コミュニティを維持するため自治会組織の分断と再編を行うことにより無秩序な混住化を防いだ典型として報告されている¹⁶⁻¹⁸⁾が、近年は人口も頭打ちとなっており¹⁹⁾、今後の地域コミュニティ構築への課題が懸念される。

天満地域は、毎年10月21・22日に開催される「魚吹八幡神社秋季例祭」(以下祭り)に参加している(写真-1)。約1700年の歴史を有するとされる当該祭りは、平成18年に兵庫県無形重要文化財に指定されている。また、25ヵ村約1万数千戸の氏子を抱える播州最大の祭りとしても知られており、本宮では境内や門前に、屋台(青年団によって担ぎ出される神輿屋根型の太鼓台)18台、壇尻4基、神輿3基などが一同に会す。当該祭りは各自治会が祭りの運営主体となっており、図-1の網掛けは、祭りに参加している自治会の範囲を示し、原則1つの自治会が1台の屋台(壇尻の場合もある)を所有している。祭りの運営体制や屋台の担ぎ方は自治会ごとに性格を違え、勇壮さや優美さを競うように練る

*兵庫県立人と自然の博物館

**西宮市役所

***大阪府立大学大学院生命環境科学研究科

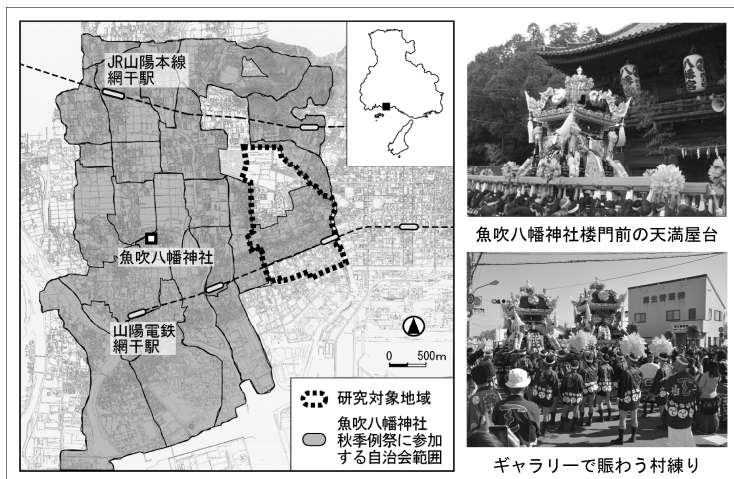


図-1 研究対象地域と祭りの様子

姿が特徴である²²⁾。天満地域は、幕末から明治期の「屋台順番記」において、屋台の1番宮入が定められていた由緒ある地域であるが、現在では図中の破線枠内に示すように、祭りに参加する自治会と参加しない自治会が混在する現状にある。

(2) 調査・解析方法

研究対象地域では、自治会組織が祭りの運営組織となっているため、自治会組織とかつての祭りの状況(自治会組織の変容過程、祭りの変化など)について、前自治会長(1名)、および祭典委員(委員長1名、世話人2名)への対面式のヒアリング調査と文献史料^{16-18,21)}から把握した。祭りの運営の現状(運営体制、決まりごとなど)については、前自治会長および祭典委員長(各1名)、幹部(4名)への対面式ヒアリング調査から把握した。また既往研究¹⁰⁻¹²⁾より、祭りの空間利用が居住者に影響を及ぼすことが指摘されていることから、地域内を屋台が巡回しながら子供屋台や隣隣の屋台と練ったり花代を徴収する「村練り」²²⁾時の屋台を追跡し、屋台の空間利用を把握した。同時に、子供屋台との練りや花代を出す世帯の有無など巡回時の様子(目視により確認)から各地区と祭りとの関係の深さを検討した。

次に、上記の組織的変容や祭りの運営実態に基づき、対象地域を[旧集落][昭和33年の航空写真において建物が存在した地区][天満1区][安田・五反長][恵美酒・天神][大津町]の5地区に区分し、地区ごとの祭りへの関わり方やコミュニティ意識を把握するため、アンケート調査を実施した²³⁾。アンケート用紙は、各地区200部の計1000部を、世帯に対して無作為に直接ポストに配布し、同封の返信用封筒にて回収した。世帯主に世帯を代表した回答を求めるとし、設問内容は、回答世帯の属性に関する選択式の設問(居住地、居住年数、家族構成など)のほか、祭りへの関わり方²⁴⁾を回答させた。また、祭りの認識については、「祭りがもたらしている効果」と「祭りが継続されるためにどのようなことが重要であるか」に関する各項目を4段階評価(全く重要でない:1点~大変重要である:4点で点数化)させた。さらに、コミュニティ意識については、「隣近所と今後どの程度お付き合いをしたいか」を5段階評価(全く付き合いたくない:1点~積極的に付き合いたい:5点で点数化)させ、「地域行事への参加の程度」を行事ごとに4段階評価(知らない:1点~毎回参加:4点で点数化)させ、「自分の住んでいる地域、と言われた場合どの範囲をイメージするか」について8項目(隣近所~姫路市)より選択させ、「イメージした自分の住んでいる地域にどの程度愛着があるか」を5段階評価(全く感じていない:1点~非常に感じている:5点で点数化)させることで、地域コミュニティを形成

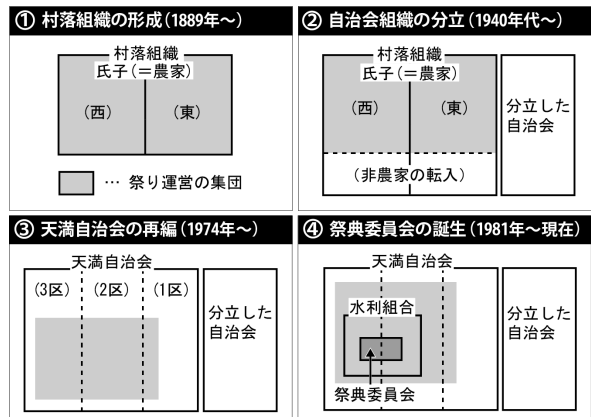


図-2 自治会組織と祭りの運営集団の変容過程

する上での意識について把握した。配布期間は平成22年10月26~28日、投函期限を11月15日とし、全体の回収率は22.9%(旧集落:80部、天満1区:36部、安田・五反長:58部、恵美酒・天神:30部、大津町:25部、計229部)であった。なお、回答者の自治会への加入率は100%であった。

アンケートの結果は、単純集計の他、地区別での祭りへの関わり方はクロス集計にて解析し、調整済み残差による差の検定を実施した。地区別の祭りへの認識については、回答結果を点数化し、平均値と標準誤差を算出し、同時に有意性の検定も行った。さらに、祭りへの関わり方(2世代以上参加:34世帯、1世代参加:38世帯、観覧:69世帯、関わりなし:52世帯)とコミュニティ意識との関係について把握するため、地域行事の参加の程度や地域への愛着度などに関する回答結果を点数化し、祭りへの関わり方ごとに平均値と標準誤差を算出し同時に有意性の検定も行った。

なお本研究では、「祭りへの参加」は、「屋台を担いだり運営に携わること」を表し、居住者の「祭りへの関わり方」は、「祭りに2世代以上で参加する、1世代で参加する、観覧のみ、関わりなし」の4項目から把握することとした。

3. 結果および考察

(1) 自治会組織と祭りの変容

天満地域における自治会組織は、図-2のように大きく4時期に整理された。以下時期ごとに説明する。

1) 村落組織の形成

史料²⁵⁾より、天満地域は、12世紀には福井荘と呼ばれる荘園であり、その後海岸に向かって新田開発を進めながら発展し、永仁7(1299)年天満村が発足したとされる。明治22(1889)年の町村制施行により周辺5カ村と合併して大津村となったが、村役場は旧天満村内につくられた。史料¹⁹⁾およびヒアリング調査より、当時の村落には「東」「西」という地域区分に従い生産集団、檀家集団、氏子集団などが構成され、東は神明神社、西は蛭子神社を祀り、祭り屋台も東西各々で所有していたという。また、祭りと農業が密接な関係にあり、昭和初年に至るまで、その年の豊作・不作によって祭りの屋台の参加台数が決まっていたとされる。

2) 自治会組織の分立

史料²⁵⁾より、昭和12(1937)年、臨海部にN製鉄所が建設され、同時期に県の土地区画整理事業が実施された後、昭和17(1942)年には、山陽電鉄飾磨一網干間が開通し、昭和21(1946)年には姫路市に合併したとされる。それ以来、製鉄とその関連企業の社宅や戸建住宅などが立ち並び、急速に都市化が進行し、これらの新興住宅地が、次第に天満自治会から分離し、新しい自治会を誕生させたことが読み取れた。また、ヒアリング調査と史料

16,21)より、天満地域南部の市営住宅やN製鉄関連社宅の建設により、昭和29年(1954)「天神自治会」、昭和30年(1955)に「恵美酒自治会」が分立し、天満地域北部に大津団地が建設され、昭和40年(1965)に「大津団地自治会(大津町)」が分離し、団地建設に伴う商店街の発展により、昭和39年(1964)に「五反長自治会」が分離したとされる。さらに、昭和48年(1973)には、持ち家政策によって住宅を取得したN製鉄社員を主とした「安田自治会」が分離し、天満地域から計5つの自治会が分立した。

さらに、ヒアリング調査より、当時は「連中」と呼ばれる同世代の集団を基礎に構成される東西の「青年団」各々が祭りの運営主体を担っていたが、昭和26年(1951)前後に東西の青年団は統一されたとされる。しかし、新規居住者が祭りに参加することはなく、分立した自治会に加入する地縁者も、原則祭りに参加できなくなるとされる。

3) 天満自治会の再編

史料²¹⁾では、昭和49(1974)年、取り残された天満地域の居住者は、自治組織を天満自治会に改名したとされる。また天満自治会内においても、円滑に非農家世帯を迎えることを目的に、自治会組織の再編が行われ、新興住宅用地を「1区」、旧集落の東西をそれぞれ「2区」「3区」とする3つの区分がなされた。ヒアリング調査より、この天満自治会の再編とともに東西の屋台が1台に統一され、天満自治会が祭りの運営母体となり、昭和49年(1974)からは毎年本宮に参加するようになったことがわかった。

4) 祭典委員会の誕生

史料¹⁷⁾より、用水管理は当初自治会組織が担っていたが、非農家世帯の増加に伴い、会計運営が難しくなり、昭和56(1981)年、水利組合が独立したとされる(天満自治会の農家世帯は全て加入)。また、ヒアリング調査の結果、水利組合の独立と同時に祭りの運営を統括する「天満祭典委員会」が発足され、祭典委員に非農家世帯が含まれることはなく、新旧居住者の組織上の区別が明瞭になったといわれている。

以上のように、製鉄所建設や電鉄の開通を機に、非農家世帯が転入して人口が増加した。これに伴い、無秩序な混住化を防ぐ目的で、村域および村落組織を6つの自治会に分割させ、天満自治会内も3つに区分された。このような自治会組織の分割・再編により、祭りに参加することのできる居住者が限定的になった。

(2) 祭りの運営実態

1) 運営組織内の現状

天満自治会の祭りに参加する男性には、以下のような「しきたり」と認識されている社会規範が存在する。表-1のような社会的地位が定められており、祭りの主役ともいえる屋台の担ぎ手は、高校生から22歳に限定されているが、それ以外の者も各々役割を持ち、厳しい秩序のもと祭りが運営されている。そのため、子供会以降は、青年団、賛助会などを経るべきとする社会的圧力が存在し、祭りの会合のたびに仕事を休んで帰省する者も珍しくない。また、組織内のほとんどが2,3区の旧集落の地縁者であり、他自治会からの祭りへの参加は、旧集落の転出者や血縁者などの例外を除き認められていない。

表-1 祭りの運営集団における年齢階梯制

地位(呼称)	年齢(学年)	役割
子供会	小1~小6	子供屋台を担いで祭りに参加
乗り子	中1	神の申し子として屋台に乗り太鼓をたたく
青年団(目の出/上日の出)	中2/中3	祭りの裏方として仕事を覚える
青年団(練り子・若い衆)	高1~22歳	正式な青年団として屋台を担ぐ
青年団(準幹部/幹部)	23歳/24歳	青年団を指揮する
賛助会	25~35歳	祭りの運営の顧問をする
祭典委員	36歳以上	
その他役員	40代以上	世話人、協議委員、自治会長など

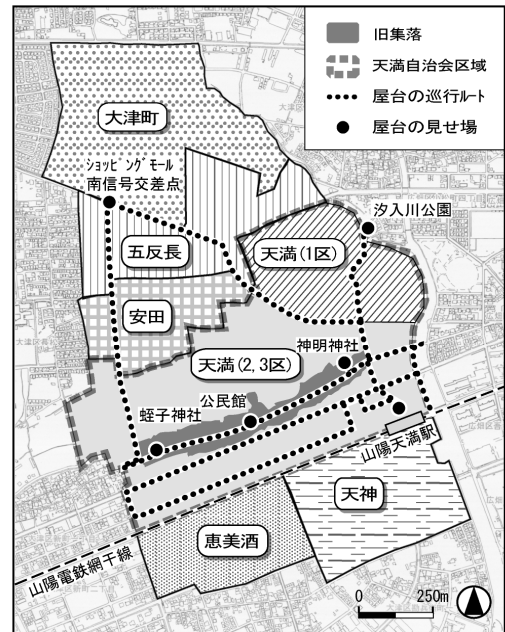


図-3 天満地域における祭り屋台の巡行ルートと見せ場

しかし、近年は祭り運営の入口である子供会への非加入者や中途脱退者が増加しており、祭りの衰退を危惧する声も存在する。

2) 屋台の巡行ルートと各自治会区域との関係

図-3に示すように、祭り宵宮の「村練り」において天満地域を屋台が巡行するルートと屋台の見せ場の空間利用を把握し、各自治会区域と祭りとの関係の深さを検討した。

屋台は、天満自治会2,3区内の旧集落やその南部を主として巡行している。また、祭りに参加できない自治会区域内にも巡行しており、安田自治会と五反長自治会区域内には巡行の際、花代を出す世帯が存在する。そして、大津町側に開けたショッピングモールの交差点において、安田自治会と五反長自治会の子供会による子供屋台と練り合う。また、北西部の旧村境界にあたる汐入川公園で、隣村の西土井屋台と練り合うため、天満1区内を往復する。しかし、恵美酒自治会と天神自治会区域では、山陽電鉄線路で物理的に遮られ、ほとんど関わりを持たないことが特筆される。

(3) 対象地の地区区分と各地区の概要

以上の自治会組織の変容や祭りの運営実態より、祭りに参加可能な地区が否か、自治会の分立時期、屋台の空間利用による祭りと地区の関係の深さなどを基準とし、対象地を5地区に区分した。

まず、天満自治会2,3区内で昭和33年の航空写真において建物が存在し、旧村組織の中心かつ、現在も祭り運営組織の中心を担っていると考えられる地区を「旧集落」とした。

次に、同じく天満自治会区域内に新規転入者誘致の目的で2,3区と隔てられた地区を「天満1区」とした。2,3区同様に役員を出しており、祭りに参加することができる。

続いて、1964年に分立した五反長自治会、1973年に分立した安田自治会を合わせて「安田・五反長」とした。祭りに直接的に参加できない地区であるが、両自治会の子供会による子供屋台が存在し、大型ショッピングモールの交差点において天満屋台と練り合う。また屋台巡行の際に花代を出す世帯が存在するなど、比較的祭りと地域の関係が深いと考えられる。

さらに、天満地域南部に位置し、1954年1955年に分立した天神自治会と恵美酒自治会を合わせて「恵美酒・天神」とした。祭りに参加できず、かつ屋台が巡行しない地区である。近年、両自治会子供会は、魚吹八幡神社とは別の神社の祭りに参加している。

最後に、天満地域北部に位置し、1965年に分立した地区を「大津町」とした。近年、製鉄所の団地や社宅跡地にハウスメーカーによる大規模な宅地開発が進んでいる。祭りに直接的に参加できず、団地や社宅の解体に伴い、現在子供会が存在していない。

(4) 地区別にみた居住者属性

本アンケート調査では、各地区の回収数にばらつきがみられた結果となった。そのため、必ずしも地区の総意を表現しているとは限らず、ある一定の限界性の中ではあるが、前述した各地区の変遷や特性を反映して、地区間での居住者属性が下記のように異なることから、地区間の居住者の意識の差異を反映し得る点において妥当性を有するデータであると判断し、5地区での集計・解析を続行することとした。

まず、表-2より「旧集落」では、回答者の7割以上が1980年以前から住んでおり、平均居住年数が45.1年と他地区の回答者と比較して最も長かった。また、3世代で暮らす回答者が約3割を占め、他の地区に比べて有意に多い結果となった(有意水準5%

表-2 地区別の居住者属性

地区	平均居住年数(年)	住み始めた年の地区別割合(%)		家族構成の地区別割合(%)			
		1980年以前	1980年以降	単身	夫婦	2世代	3世代
旧集落	45.1	76.4	23.6	6.3	19.0	45.6	29.1
天満1区	24.9	48.6	51.4	11.1	36.1	44.4	8.3
安田・五反長	26	48.3	51.7	5.3	33.3	54.4	5.3
恵美酒・天神	22.4	28.6	71.4	3.3	30.0	46.7	20.0
大津町	23.3	12.0	88.0	0.0	44.0	48.0	8.0

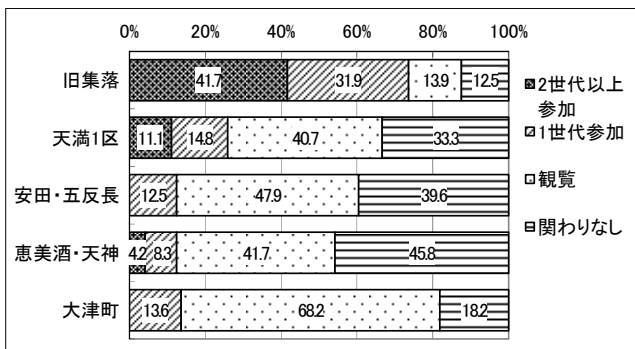


図-4 地区別にみた祭りへの関わり方

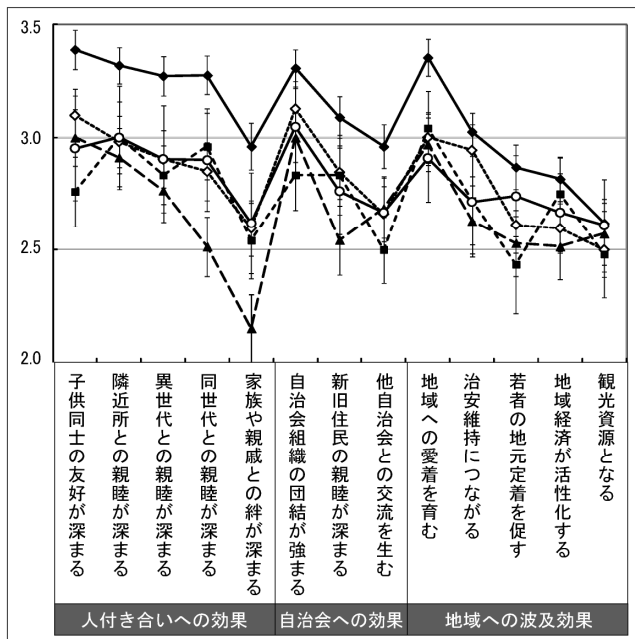


図-5 地区別にみた祭りのもたらす効果に関する評価

未滿)。対して「天満1区」では、旧集落からの転出者の他、居住者属性にあまり定まりがなく、混住化が進んでいると考えられた。また、「安田・五反長」では、回答者の約5割が1980年代以前から住んでいると回答したのに対し、「恵美酒・天神」では1980年以前に住み始めた回答者は3割程度となった。一方「大津町」では、1980年以降に住み始めた「夫婦のみ」か「夫婦と子供世帯」の回答者が約9割を占め、大津区外や姫路市外からの転入者が約7割と、他地区に比べて遠方からの転入者が多い結果となった。

(5) 祭りへの関わり方

祭りへの関わり方について、親子2世代以上で参加、1世代で参加、観覧するのみ、関わりなしに4分類し、地区ごとに集計した(図-4)。その結果、「旧集落」においては、「2世代以上参加」が41.7%と最も多く、「1世代参加」を含むと73.6%の世帯が祭りに参加していた。同時に、祭りに参加すると答えた回答者を対象に、祭りへの参加理由を問う設問では、55.6%が「地域のしきたりとして」、25.4%が「祭りが好きだから」と回答しており、参加者の半数程度が表-1の年齢階梯制を意識し、祭りに参加していると考えられる。対して、同じ自治会内で祭りに参加可能な「天満1区」においては、1世代、2世代以上を合わせた参加が25.9%となり、「旧集落」と比べて大きく減少した。

一方、原則祭りに参加できない地区においても、「観覧」を含めると、半数以上の世帯が祭りと何らかの関わりを持っていると回答した。特に、「大津町」の「観覧」世帯の割合が、他地区と比べて有意に高く(有意水準1%未滿)、80%以上の回答者が祭りに関わりを持っていた。これは、「大津町」の居住者が比較的遠方からの転入者で構成されていること、大型ショッピングモール南側交差点での屋台練り合わせが、ギャラリーを生むきっかけとなっていることなどが影響している可能性がある。対して「恵美酒・天神」では、祭りに関わりがないと回答した者が有意に多く(有意水準1%未滿)、約半数の世帯が祭りに関わりがなかった。これは、子供会が別の祭りに参加していることや、屋台巡行ルートが空間的に隔たれていることなどが影響している可能性がある。なお、天満自治会以外の地区において祭りに参加している者は、天満自治会からの転出者や血縁者であることが、アンケート調査および幹部へのヒアリング調査により確認されている。

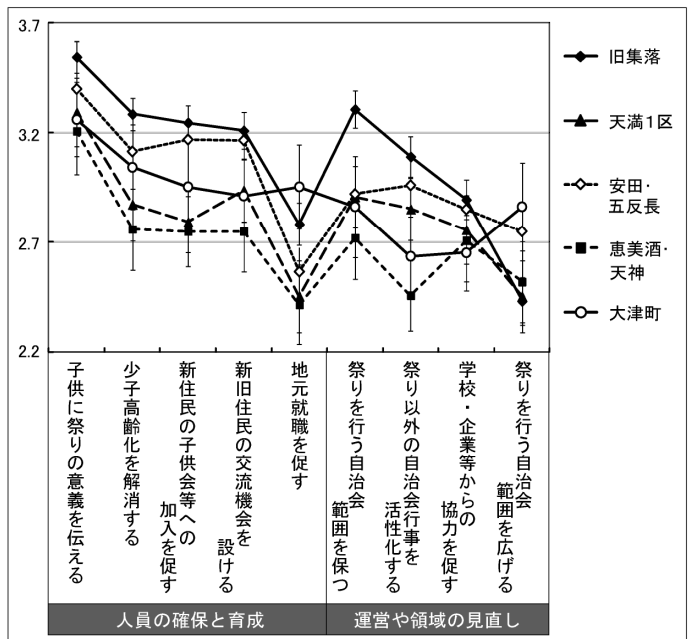


図-6 地区別にみた祭りの継続に必要な項目の重要度

(6) 地区別にみた祭りの効果と継承性に関する認識

祭りがコミュニティや地域へもたらす効果について評価させた結果を図-5 に示した。[旧集落]においては、「子供同士の友好が深まる」「隣近所や異世代・同世代との親睦が深まる」といった人付き合いへの効果、「地域への愛着を育む」などの項目を中心に、総じて他の地区より評価が高かった。祭りへの参加を通して、居住者間や地域との結びつきが強くなると認識している傾向が示された。対して[天満1区]が「家族や親戚との絆が深まる」「同世代・新旧住民との親睦が深まる」といった項目への効果が他地区よりやや低い評価となった。居住者属性に定まりがなく混住化が進む[天満1区]では、祭りによって居住者間の交流が必ずしも図られていない可能性が推察される。

続いて、祭りが継続されるために必要な項目について、その重要度を評価させた結果を図-6 に示した。その結果、どの地区も「子供に祭りの意義を伝える」が最も高かった。また、「祭りを行う自治会範囲を保つ」が[旧集落]において特に高く、逆に「祭りを行う自治会範囲を広げる」が消極的であったことから、[旧集落]では、しきたりを維持することが祭りの継承に重要だと捉えている傾向が窺えた。一方、祭りに参加できない地区に着目すると、観覧する世帯の割合が有意に高かった[大津町]や、祭りを行う自治会に隣接して子供屋台が練り合わせに参加している[安田・五反長]において、「祭りを行う自治会範囲を広げる」ことをやや好意的に捉えていた。これに対し、屋台が巡行せず祭りとの関わりがない回答者が有意に多かった[恵美酒・天神]では、祭りの継続に関して総じて重要度が低い傾向となった。

このように、[旧集落]とそれ以外の地区で祭りの継承性に関する認識が大きく異なっていることが明らかとなった。これに関連して、アンケート調査における自由記述では、『魚吹八幡神社の地域に住みながら自治会が違うことにより、個人が祭りに参加したくても参加できない若者もいる(安田自治会・50代)』や『一部の人には、旧村意識・よそ者意識が未だ存在するように思われる(安田自治会・70代)』など、自治会による隔たりや、新旧居住者の確執などにより、祭りに参加したくても参加できない現状が記されていた。これらのことから、祭りに関わりがあるが直接参加できない地区において、運営の閉鎖性に不満を持ち、運営範囲を広げることを望む居住者も存在することが明らかとなった。

(7) 祭りへの関わり方とコミュニティ意識の関係

祭りと居住者のコミュニティ意識との関係をより詳細に把握するため、[2世代以上参加][1世代参加][観覧][関わりなし]の4段階の祭りへの関わり方ごとにコミュニティ意識に関する回答を集計した。

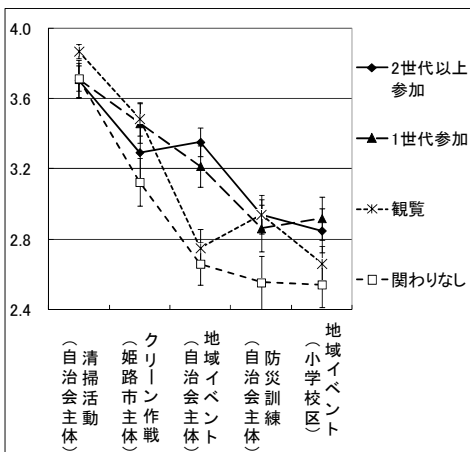


図-7 祭りへの関わり方と地域行事への参加度

まず、今後の隣近所とのお付き合いの程度の結果を表-3 に示した。その結果、祭りに参加している世帯は、祭りに全く関わりを持たない[関わりなし]の世帯より、今後のお付き合いの程度が有意に高かった。祭りでは、隣近所の家々に集まり、氏子集団に食事やお酒を振舞う習慣が現在も残っており、隣近所共同体としての意識が、今後のお付き合いの程度を高めている可能性が考えられる。

次に、地域行事への参加の程度を示した(図-7)。自治会主体の清掃活動は全ての世帯で参加度が高かった。地区間の差に着目すると、自治会主体の地域イベント(祭り以外のスポーツ大会など)では、[観覧][関わりなし]世帯の参加度が低く、祭りへの参加の有無で差が生じたが、自治会主体の防災訓練では、[関わりなし]世帯のみが有意に低くなった。このことから、祭りへの関わりが深いほど、地域の共同活動に積極的な傾向があるといえる。

続いて、祭りへの関わり方と「自分の住んでいる地域」に対するイメージ範囲との関係を示した(図-8)。その結果、祭りに参加している世帯は、祭りの運営主体である「自治会区」を地域とイメージする世帯が半数以上を占めたことが特筆される。一方[観覧]世帯では、「自治会区」をイメージする割合が低く、丁目や住宅街や団地、隣近所と回答する者の割合も比較的多くなり、地域イメージに定まりがなかった。

また、上記でイメージされた地域への愛着の程度を示した(表-4)。その結果、[2世代以上参加]と[1世代参加]は同程度に地域への愛着度が高かった。そして、[観覧]は[関わりなし]に比べて愛着度が有意に高く、祭りを観覧することと地域への愛着の程度に関係がある可能性が示された。

4. 総括および今後の課題

本研究対象地である天満地域は、市街化に伴う人口流入により、村域および自治組織を分割することで無秩序な混住化を防ぎ、地縁的コミュニティを維持してきた。同時に、祭りの運営についても旧いしきたりを継承することを重視し、旧集落を中心とする閉

表-3 祭りへの関わり方と今後のお付き合いの程度

2世代以上参加		1世代参加		観客		関わりなし	
平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差
3.62	0.12	3.65	0.14	3.47	0.08	3.40	0.09

表-4 祭りへの関わり方と地域への愛着度

2世代以上参加		1世代参加		観客		関わりなし	
平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差	平均値	標準誤差
4.35	0.12	4.32	0.12	3.87	0.09	3.67	0.10

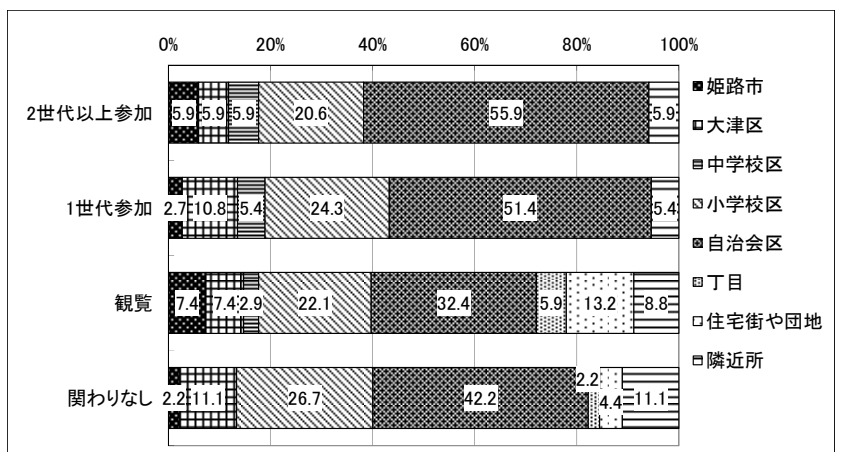


図-8 祭りへの関わり方と地域のイメージ範囲

鎖的な地縁集団によって運営されていることが明らかとなった。また、本研究により天満地域は大きく「旧集落」[天満1区] [安田・五反長] [恵美酒・天神] [大津町]の5つの地区に区分され、アンケート調査の回答世帯より、地区ごとの祭りへの関わり方をみると、原則祭りに参加できない「安田・五反長」[大津町]でも祭りを観覧するなど6割以上の世帯が祭りとは何らかの関わりを持っていることが判明した。そしてこれらの祭りとの関わりは、村練りにおける屋台巡行ルートとの空間利用や子供会と祭りとの関係が影響している可能性が示唆された。

さらに、祭りのもたらす効果や継承に関する認識では、祭り運営の中心である「旧集落」が、人付き合いを深める効果を特に高く評価し、祭りの継承には運営主体である自治会範囲を維持することを重要視する傾向にあったが、村練り時に祭りとの関係の深い「安田・五反長」などでは運営範囲を広げたいとする傾向もみられ、地区ごとでの祭りに関する認識の違いが明らかとなった。

しかしながら、このように自治会が分割され、地区ごとに祭りへの関わり方や認識が異なる地域であっても、祭りに参加する世帯はコミュニティ意識が相対的に高いこと、祭りを観覧するのみの世帯においても、地域イベントへの参加度や地域への愛着度が、祭りに関わりがない世帯より高くなることが明らかとなった。これより、既往研究⁶⁻¹²⁾で言及されている祭りへの参加がコミュニティ形成に寄与するという知見に加え、祭りを観覧することも地域コミュニティ形成に有用である可能性が示唆された。

以上より、本研究対象地では、祭りが地域コミュニティに与える影響は大きいと考えられ、今後祭りを通じた地域コミュニティの再構築を図るためには、旧集落以外の地区の居住者に対して、祭りへの関心をいかに惹き付け、祭りに関心を持つ者をいかに運営に巻き込んでいけるかが重要であると考えられる。

そのための祭りの方向性として、本研究で示唆された屋台の巡行ルートや子供会（地域内の子供）と祭りとの関係について見直しを行うことが挙げられる。たとえば、巡行ルートを広げて新興住宅地内や小学校前においても屋台の見せ場を設けることなどが考えられる。また、居住者のイメージする「地域」の範囲が重なり合うよう、子供のコミュニティ単位である小学校区や、かつての村域単位など、より広域的に子供と祭りが関わることのできる機会を創出することなどが考えられる。さらに、こうした試みによって、他自治会で祭りの運営に参入したい居住者が現れた際に、それを受け入れられる運営組織となるよう、しきたりの緩和などの運営上の合理化を検討する必要がある可能性もある。こうした祭りをより広域的に継承する取り組みが、地域コミュニティを育てていくものとする。

本研究の課題として、アンケート調査において地区ごとの回答数にばらつきがみられ、ヒアリング調査においても旧集落中心の情報収集となったことが挙げられる。祭りの運営上の課題とそのあり方をより詳細に捉えるためには、旧集落以外の地区の役員等に対しても十分なヒアリング調査を重ねるなど、より多面的に意見を収集する必要があると考える。また、本研究は市街化に伴い自治会が分割した天満地域（旧天満村域）のみを対象としたが、自治会組織を分離せずに当該祭りを継承している周辺地域（近隣の旧村域）における運営上の課題やコミュニティ意識を比較すること、天満地域と周辺地域とのネットワークによる祭りの継承の可能性を探ることなどにより、祭りとは地域コミュニティとの関係についてより知見が深まるものとする。

謝辞：本研究を遂行するにあたり、ヒアリング調査ならびにアンケート調査に快く応じていただきました天満地域の住民の方々に、深く感謝の意を表します。

補注および参考文献

- 鎌田元弘・坂本享二・細矢健太郎・西村昌彦（2002）：混住化農村地域における新住民行政のコミュニティ形成—混住化による再編過程を経た行政区を事例として—, 日本建築学会計画系論文集, 555, 215-222
- 村松健児・真野洋介（2008）：東京近郊における伝統的地縁組織から町会への変遷過程に関する研究, 都市計画論文集, 43(3), 181-186
- 山野信彦・本田友一郎・伊藤裕久（2002）：近代における東京の祭礼空間の変容に関する研究, 都市計画論文集, 37, 661-666
- 山内一宏（2009）：少子高齢化時代におけるコミュニティの役割—地域コミュニティの再生—, 立法と調査, 288, 189-195
- 本研究でいう「祭り」は、伝統的に地域で継承されてきた祭りを対象とするが、神仏や祖先を祀るための「祭祀（儀式）」としての祭りではなく、宗教色を極力排除して街を巡行する「祝祭」としての祭りについて取り扱う。
- 杉本容子・鳴海邦頭・澤木昌典・岡絵理子（2003）：大都市市街地内古集落における新来居住者の旧来コミュニティへの参入可能性に関する研究—伝統的祭りの参加実態と意識を通じて—, 環境情報科学論文集, 17, 183-188
- 根岸亮太・後藤春彦・田口太郎（2007）：祭事が地域運営に与える影響に関する研究—埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として—, 日本建築学会計画系論文集, 622, 129-136
- 木田恵理奈・後藤春彦・佐藤宏亮（2011）：商店街振興組合による祭礼運営を通じた地域コミュニティ形成に関する研究—高松市丸亀町商店街を事例として—, 都市計画論文集, 46(3), 481-486
- 塚佳織・山本信次（2010）：祭礼行事のソーシャル・キャピタルへの影響—岩手県陸前高田市気仙沼町けんか七夕を事例として—, 農村計画学会誌, 28, 231-236
- 川原晋・岡村祐（2011）：都市祝祭空間の解明から進める都市デザインと震災復興計画の視座, 2011年度日本建築学会大会資料集寄稿
- 神野夏子・木多道宏・奥俊信・鈴木毅・松原茂樹（2008）：都市祭礼による地域コミュニティの再構築に関する研究—二つの巡行が重層する大阪府桃園・桃谷・金瓶・東平連合を事例として—, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 48, 13-16
- 黒川朋広・中村攻・木下勇（1996）：千葉県佐原市の山車祭りにおける都市の祭礼空間とその利用に関する研究, ランドスケープ研究, 59(5), 245-248
- 駒井恵・増井正哉（2009）：町並み景観の変容と祭礼時における空間演習の変化の関係性に関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 49, 497-500
- 石田寿信（2009）：鬼石夏祭りの屋台巡行経路からみた街路空間の利用形態について, 日本建築学会学術講演梗概集 F-2, 401-402
- 杉本容子・鳴海邦頭（2003）：大都市内古集落を核とした市街地およびコミュニティの変容に関する研究, 都市計画論文集, 38(3), 121-126
- 小林和美（1994）：混住化と伝統的社会集団—兵庫県姫路市天満地区の事例—, ソシオロジ, 38(3), 117-133
- 小林和美（1996）：日本村落社会における用水管理組織の社会史的研究, 神戸大学博士論文, 76-93
- 藤井勝（2001）：兵庫県内農村社会の変動過程に関する研究, 神戸大学, 397pp
- 姫路市統計情報
<<http://www.city.himeji.lg.jp/toukei/index.html>>2013.12.3更新, 2013.12.5参照
- 宗教色を極力排除し、見物客を意識しながら地域を巡る「巡行型祝祭」¹⁰⁾としての性格が強い祭りといえられる。
- 田村善太（2000）：『天満村史』姫路市東天満土地区画整理組合, 兵庫, 772
- 「村練り」は、魚吹八幡神社秋季例祭の宵宮という位置づけであるが、昭和48年までは、本宮に出ずとも村練りだけは実施することもしばしばあり（祭典委員長ヒアリング調査より）、地域と祭りの関係において重要な位置づけであると認識される。
- 自治会組織により区分した地区は、行政区と異なるため、各地区の世帯数は推計にとどまる。天満（平成17年度世帯数：1559戸）、北天満町（29戸）、恵美酒町1丁目（146戸）、天神町1丁目（197戸）の計1731戸が「旧集落」[天満1区] [安田・五反長]の3地区を構成しており、[恵美酒・天神]が恵美酒町2丁目（240戸）と天神町2丁目（629戸）を合わせた869戸（うち300戸余りの県営住宅は組織的変容から対象外）、[大津町]が576戸（うち180戸は組織的変容から対象外）となり、概ね各地区の世帯数は500戸前後と考えられる。
- 回答世帯の祭りへの関わり方は、世帯主と世帯主以外の家族全員（祖父・祖母・父・母・子）の過去も含めた関わり方を、「a.祭典委員・賛助会員・世話役人として、b.青年団幹部役員として、c.青年団員として、d.子供会員として、e.観覧するのみ、f.関わりなし」の6種より選択させた。解析ではa・b・c・dを祭りへの参加として捉え、各世帯の祭りへの関わり方を「2世代以上参加, 1世代参加, 観覧, 関わりなし」に集計した。